

～輝きの子育て～

読書について

秋の読書週間（10月27日～11月9日）に因んで読書について書きたいと思い、過去の「読書」について記したことの中で良いものがありましたので、再度、掲載させていただきます。

「橋をかける」～子供時代の読書の思い出～皇后陛下、美智子様（1998年インドのニューデリー、アショカホテルで開催された国際児童図書評議会、第26回世界大会において、初日にビデオテープによって上映された基調講演を収録したものです。

最後の部分にこの講演のまとめがありましたので、ご紹介させていただきます。

「今振り返って、私にとり、子供時代の読書とは何だったのでしょうか。何よりも、それは、私に楽しみを与えてくれました。そして、その後に来る青年期の読書のための基礎を作ってくれました。それは、ある時には、私に根っこを与え、ある時には翼をくれました。この根っこと翼は、私が外に、内に、橋をかけ、自分の世界を少しずつ広げて育てていくときに、大きな助けとなってくれました。読書は私に、悲しみや喜びにつき、思い巡らす機会を与えてくれました。本の中には、さまざまな悲しみが描かれており、私が、自分以外の人、どれほどに深くものを感じ、どれだけ多く傷ついているかを気づかされたことには、本を読むことによってでした。自分とは比較にならぬ多くの苦しみ、悲しみを経ている子供達の存在を思いますと、私は、自分の恵まれ、保護されていた子供時代に、なお悲しみはあったということを抑えるべきかもしれません。

しかし、どのような生にも悲しみはあり、一人一人の子供の涙には、それなりの重さがあります。私が自分の小さな悲しみの中で、本の中に喜びを見出せたことは恩恵でした。本の中で、人生の悲しみを知ることは、自分の人生に幾ばくかの厚みを加え、他者への思いを深めますが、本の中で、過去現在の作家の創作の源となった喜びに触れることは、読む者に生きる喜びを与え、失意の時に生きようとする希望を取り戻させ、再び飛翔する翼をととのえさせます。悲しみの多いこの世を子供が生き続けるためには、悲しみに耐える心が養われると共に、喜びを敏感に感じとる心、又、喜びに向かって伸びようとする心が養われることが大切だと思います。

そして、最後にもう一つ、本への感謝をこめてつけ加えます。

読書は、人生の全てが、決して単純でないことを教えてくれました。私たちは、複雑さに耐えて生きていかなければならないということ。人と人との関係においても。国と国との関係においても。子供達が、自分の中にしっかりと根を持つために、子供達が、喜びと想像の強い翼をもつために、子供達が、痛みを伴う愛を知るために、そして子供達が、人生の複雑さに耐え、それぞれに与えられた人生を受け入れて生き、やがて一人一人、私共全てのふるさとであるこの地球で、平和の道具となっていくために。」

非のうちどころのない読書論です。美智子皇后陛下を皇室に持つことは、日本人の誇りを感じます。

片野 英司



「橋をかける 子供時代の読書の思い出」美智子（文春文庫）引用